

# ロバート・リッジウェイ氏追悼の會

元ニューヨーク市交通部技師長ロバート・リッジウェイ氏が昨年12月19日急逝の報傳はるや、我國の各方面に於ても痛惜の情を表せられ、3月28日神田の學士會館に於てリ氏追悼の會が催された。

當夜は嘗て滯米中にリ氏の指導をうけた堀越清六、山崎匡輔、井上隆根、岡田實、三浦義男の諸氏が世話人となり、鐵道關係の有志30餘名出席して、リ氏の人格徳望を讃へ、晚餐を俱にし、記念撮影をなし、當夜の次第をリ氏未亡人に贈らるゝ豫定である。

リッジウェイ氏はニューヨーク市地下鐵道建設の權威者で、我國の視察者及び工事研究者に常に懇切なる指導と便宜を與へられた人である。特に我國鐵道關係の技術家はリ氏の世話になつた人が甚だ多い。且つ1929年の東京に於ける萬國工業會議には、リ氏も出席のため來朝され、我國には關係の深い技術家である。

リ氏が國際的な技術家として、人格者として餘りにも立派な人であつた事は、國境を越えて氏の偉大さを偲ばしむるものが多々あるが、特にリ氏が日本に滯在中に、丹那隧道、關門海底隧道、及び東京地下鐵道、東京市地下鐵、大阪市地下鐵道等の設計施工に關し、リ氏に實地視察を依頼し、其意見を乞ふたのである。リ氏は心良く之を諾し、多忙な日程を割いて各地を巡り、其結果有益なる參考意見を與へられたのである。此時、鐵道省其他關係方面から各金2千圓の謝禮を贈らんとしたのであるが、リ氏は何うしても受けず「自分はニューヨーク地下鐵道の主任技師であり外國視察中に商賣をする事は出来ない」と云ふて謝禮を辭退された。

リ氏は常に「技術は國際的なもので、學問に國境はない、自分の技術が世界の何處かへ役立てば結構である」と云ふてゐた。

我國ではリ氏の學徳に酬ゆるため、旭日三



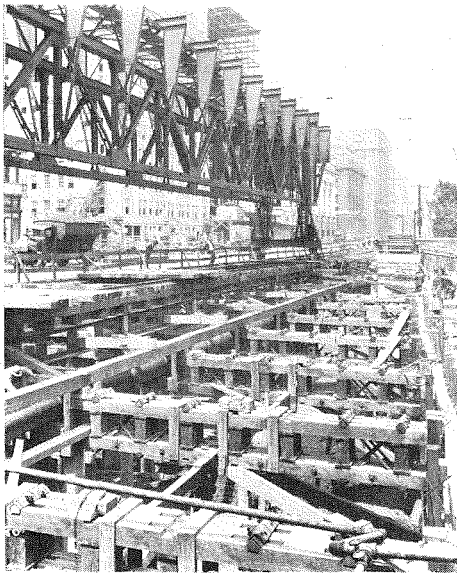
ロバート・リッジウェイ氏

等の勳章を賜はつたと聞いてゐる。

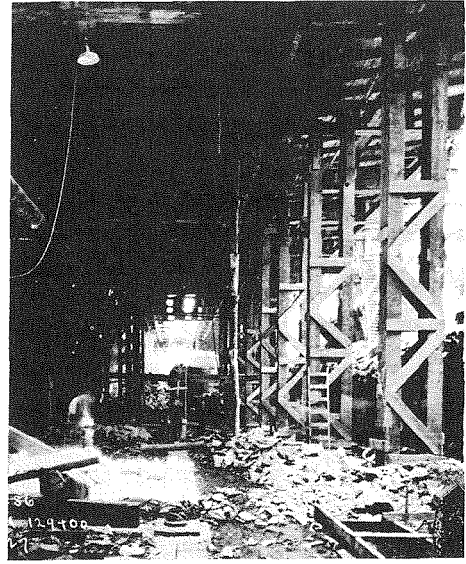
晩年になつてリ氏は米國の土木學會長に迄なつたが、然しリ氏は専門の學校教育をうけた人ではない。此點はリ氏の偉大なる人格と實力とを最もよく證明してゐるものと思はれる。

リ氏の學校教育と云ふのは米國の小學校丈で、其他は獨學により、20歳にして初めて測量手傳の鎖引から土木技術界に身を起したのである。以來一日として怠る事なく實務を勉勵し、鐵道、水路隧道等の工事に従事したが後に有名なクロトンダム工事に關係し、1890年にはニューヨーク市水道の堰堤工事を擔當し、次いで1900年にニューヨーク市の高速鐵道委員として初めて地下鐵道に關係するに至つた。其後キャッセル水道堰堤及水路隧道の主任技師となつたが、1926年から1933年に辭任する迄、ニューヨーク市地下鐵道主任技師として、最新式の世界的大工事を全部擔當したのである。

實地のみで鍛へた實力の人であるリ氏の米國に於ける偉大な工事功績は各方面で認められ、遂にハーバート大學其他から名譽博士號



ニューヨーク市地下鐵道工事(中央公園西コロンパス廣場附近の地表設備)



同地下鐵掘鑿工事地下設備

を贈られた。リ氏は何んな大工事も驚かぬが何んな小工事も粗略にせぬと云ふ人である。自家用の自動車運轉手にすらも親切丁寧なる言葉を用ひる人である。

隠忍自重して、ひたすらに工事に努めたり氏の實力が、自由の國アメリカに於て花を咲かせ、それがまた外國にまで感化を及ぼすのである。リ氏をこそ工事精神の權化と云ふべきであらうか。

(183頁よりつゞく)

自分で之を自衛するより外に方法はない。

之は單に支那事變に際する戦闘意識の強調や、優勝劣敗の生存競争を説明するものではなく、青年個々の心がまへを正しく強く導かんとするが爲のものである。大村氏は尙ほ次の如く言ふ、

此の肉體的に健康を維持すると云ふ事の根本は矢張り精神が伴はなくちゃ駄目だと云ふ事を私は申上げる必要があると思ひます。で、よく「健全なる身體に健全なる精神が宿る」と云ふ事をよく言はれて居りますが、之は私は自分勝手か知らんが前後して居ると思ふ。あれば「健全なる精神に

因に、當夜の主なる出席者は次の通りである。

八田嘉明、遠武勇熊、山田隆二、河原直文、阿曾沼均、早川徳次、橋本敬之、田中豊、安部邦衛、大井上前雄、黒田武定、佐藤忠三郎、星野茂樹、沼田政矩、中山忠三郎氏等三十餘名で、特に平井喜久松博士の夫人及び安倍、山崎兩博士の夫人も列席された。

健全なる肉體が育つ」肉體を徒らに健全にしようと思へても餘計な事を思ひ患つたり或は心配しないでも良い様な心配をしたり、或は自分が悪くて徒らに餘計な苦勞をする様な種子を蒔いたりして自分の精神力を消耗する様な所謂精神が健全でない場合とかく健康が之に伴はないと云ふ事を私は考へて居る。」

之は單なる健康法とのみ見るべきではない人類の開拓者の尊い言葉であり、大陸建設へ邁進する技術人への、良きプレゼントでもある。今後も斯かる體驗談は大に聞き度いものである、必ずしも工事に關係のないものではない。(一記者)